大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

本学学生の子どもへの関心と子ども理解の変化：小児看護学の講義前と実習後の質問紙による比較から

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2009-08-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 山中, 久美子, 吉川, 彰二, 永島, すえみ
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00010796

Bull Osaka Pref Coll of Nurs Vol 9 No 1
大阪府立看護大学紀要　9巻1号，2003

原　著

本学学生の子どもへの関心と子ども理解の変化

― 小児看護学の講義前と実習後の質問紙による比較から ―

山中久美子・吉川　彰二・永島すえみ

Changes of Students' Interest in Children and Understanding of Children
– Comparison of Questionnaire Responses before Lectures of Child Health Nursing and after Clinical Practice –

Kumiko YAMANAKA, Shoji YOSHIKAWA, Suemi NAGASHIMA

Abstract　The aim of this study was to clarify the changes in students' interest in children and understanding of them, which was the most basic goal of Child Health Nursing through the experience of attending the lectures, seminar and clinical practice; and to consider Child Health Nursing Education The subjects of this study were 72 students who had registered to take the courses. A pre-course and a post-course questionnaire were administered. Both questionnaires were designed more or less identically, and included structured and open-ended questions Responses were analyzed in four categories relating to the students' learning objectives: the child's stage of growth and development, the child's state of health; the influences of the disease, treatment and hospitalization; and the condition or function of the child's family.

According to the results, almost all students responded that they liked children and had an interest in them, both before and after the clinical practice. Almost all students had had previous experience of contact with a child; however, only 13.8% had had frequent contact. The number of responses was clearly increased after the clinical practice After considering the increase in all four categories, we surmised that the students had recognized their goal, which they were required to reach during the clinical practice. The descriptions of the influences of the disease, treatment and hospitalization were most numerous before attending the lectures, but after the clinical practice, the descriptions of the condition or function of the child's family were significantly increased.

Key word. Child Health Nursing, Interest in the child, Understanding of the child, Experience of coming in contact with a child

I. はじめに

小児看護学教育，とりわけ臨地実習の形態は様々であるが，学生の子ども観，すなわち子どもへの意識と理解に関する研究については従来より行われてきた。それらは，実習前後の比較を通して学生の子どもへのイメージの変化を明らかにしたものや[1-3]，実習への自己評価と子どもへのイメージとの関連を明らかにしたもの[4]，あるいは，保育園実習前後の比較から子どもへのイメージ変化を研究したものなどがある[5]。近年では，平成9年のカリキュラム改正

後の看護系大学における小児看護学実習の変化とその結果に関する研究，報告などがされている。その内容は，小児看護学実習での安全対策，教員の負担や困難，実習評価に関して[6]，実習での学生のより効果的な気づきを促す実習指導のあり方に関して[7]，学生の対象理解を深めていく効果的方策についてなどである[8]。

本学では，平成11年度の入学生から新カリキュラムを施行している。小児看護学方法論の授業時間の短縮，および小児看護学実習は3週間から2週間となり，今年平成14年前期に新カリキュラム施行後初めての2週間の実習を行った。講義および実習時間の短縮により，従来の学習目的の見直しと学習成果の把握，そしてより効果的な講義と実習方法の検討が求められている。

本論は，学生の「子どもへの関心」と，小児看護学においてもっとも基本的な学習目標である「子ども理解」が小児看護学の講義，演習，実習を通してどのように変化したかを明らかにし，今後の小児看護学教育の検討資料とすることを目的とする。

II. 研究対象

1. 対　象

本学看護学部，平成11年度入学生72名である。対象学生の背景は，1・2年次の基礎看護学実習I・IIに続いて3年次前期に老年看護学実習および成人看護学実習を終了しており，3年次後期から開始される小児看護学講義の開始時にはすでに上記3領域の実習を終えている。なお，小児の病態生理に関しては2年次に病態学の中で学んでいる。

2. 調査期間および方法

1）講義開始時（平成13年10月2日）

上記の対象72名に3年次後期の小児看護学概論の講義開始時にアンケート用紙を配布，回収した。

2）実習終了時（平成14年5月～7月）

同72名に，4年次前期の小児看護学実習の終了時にアンケート用紙を配布し，後日回収した。

用紙配布の際には，講義および実習評価とは無関係であること，結果発表の際には個人名を明らかにはしない旨を口頭にて説明し同意を得た。

3. 分析方法

1）択一式の質問に関する検定については，統計ソフト SAS for Windows 6.12 を使用した。

2）事例に対する自由記述の分類については，小児看護学担当の教員3名によって検討した。

4. アンケートの概要

アンケート内容は択一式質問4項目と重複質問1項目，および1事例についての質問から構成されている。

「子どもへの関心」「子どもとの接触体験の有無」「子どもが好きか嫌いか」「子どもと一緒にいたいかどうか」に関する質問は択一とし，「子どもとの接触体験の内容」の質問は重複回答とした。接触体験の内容は，10年前と比較するために楢木野らの調査項目を参考にした[9]。

質問事例は表1のとおりである。本事例は，卒業生の実習受け持ち事例を改変したものである。疾患に関してはすでに病態学で学習済みであり，アレルギー疾患は小児の典型的内科疾患である。また，内容は「子ども理解」という意味から，子どもの成長発達や入院による影響についてイメージしやすいように考慮したが，記述は最少に止めた。特に，家族に関しては全く

表1　事例

5歳の女児で，食物アレルギー，アトピー性皮膚炎，気管支喘息で入院してきました。生後6ヵ月で前記疾患を診断されて以来入退院を繰り返し，今回で，11回目の入院，当院に入院後3ヵ月が経ちました。現在，除去食療法を行っています。皮膚炎の症状は頸部や上肢・下肢に軽度見られ，掻痒のため時々無意識に掻いています。訴えの強い時は塗布薬を使っています。気管支喘息の症状は現在治まっていますが，服薬は続けています。体重 177 kg，身長　102 cm，精神発達は3歳程度です。話す言葉はしっかりしていて，明るい子どもです。

提示していない。本事例に関して，「何が気になるか，気になる点」と「看護師として本事例のケアを行っていく場合，さらに詳しく知りたい情報は何か」について質問した。「問題点」とはしないで「気になる点」としたのは広い視点から考えられることを期待したためであり，また，「さらに知りたい情報は何か」を求めたのは，学習するに従い知りたい情報は増加すると考えたからである。事例については自由記載とした。

実習終了後のアンケート内容は，「子どもへの関心」が講義開始時と比べて変化したか，およびその変化した内容の記述を追加した。

5. 小児看護学講義および実習の概要

小児看護学の講義は，小児看護学概論（2単位，30時間），小児看護学方法論（2単位，60時間）からなっており，小児看護学実習は，府下の母子医療センター小児病棟で行っている。学生は2週間1名の患児を受け持つ。配置病棟は3〜4病棟（乳児内科・外科，幼児内科・幼児外科）であり，各病棟へは3〜4人づつ，計10人から16人までの単位で実習を行っている。

実習目標は5項目あげているが，その中の講義・演習・実習を通して，子ども理解に該当する目標は，「子ども（個人・集団）と家族との直接的関わりから，子どもの生活および成長発達について総合的に理解する」であり，その実習内容として次の4点をあげている。

1）子どもの成長と発達段階（身体・心理・社会）
2）健康レベル（疾患の病態・治療・検査）
3）疾患や治療・入院生活による影響
4）家族の状況（身体・心理・社会）と家族機能

III. 結果と分析

講義開始時のアンケート回収率は95.8％（69名）であり，実習終了後は94.4％（68名）であった。結果の分析に際しては，前後回答者を同一にした結果，うち65名を分析対象とした。

なお，今回対象の学生が受け持った小児の主な対象年齢と延べ数は，0歳20名（27.4%），1歳18名（24.6%）および2〜6歳31名（42.5%），7歳以上4名（5.5%）であり，その主な疾患としては，内科系病棟では急性リンパ性白血病をはじめとする血液・固形腫瘍性疾患やウエスト症候群，胃食道逆流現象，先天性胆道閉鎖症などであり，外科系病棟では膀胱尿管逆流症や尿道下裂などの泌尿器系疾患，あるいは先天性白内障，食道閉鎖，水頭症などであった。

1. 子どもへの関心と接触体験

1）講義開始時

子どもへの関心は，関心が「非常にある」は18名（27.7%）で「ある」の36名（55.4%）を加えると83.1%の学生が関心を示していた（図1）。子どもの接触体験は「度々あった」9名（13.8%），「あった」24名（37.0%），「少しはあった」24名（37.0%），「なかった」8名（12.3%）であった。9割近くの学生が子どもと何らかの接触体験を持っていた。その体験内容は全体を通してみると（表2），「戸外での遊び」や「抱っこやおんぶ」が多く，年令によって異なるが，「排泄介助」「授乳」「入浴介助」といった体験は少ない傾向にあった。体験した対象は「弟・妹」がもっとも多く，次いで「近所の子」「おい・めい」であった。対象年齢は幼児が最も多かった。

「子どもが好きか嫌いか」については，「大好き」15名（23.1%），「好き」35名（53.8%），「どちらでもない」11名（16.9%），「わからない」2名（3.1%），「嫌い」2名（3.1%）であった。「一緒にいたいか」に関しては，「一緒にいたいと思うことがある」48名（73.8%），「どちらでもない」8名（12.3%）であった。

次いで，① 学生の子どもとの接触体験と子

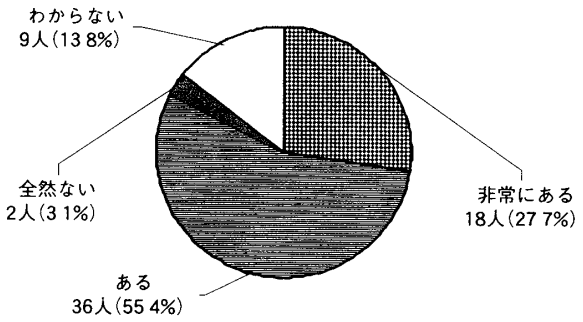

図1　子どもへの関心（講義開始時）

表２　子どもとの接触体験の内容　（%）重複記述　n=65

	排泄介助	抱っこ おんぶ	食事介助	授乳	入眠援助	入浴介助	本読み	学習指導	戸外での遊び	その他	計	回答
乳児	16	24	17	17	17	5	8	2	13	1	120	32
	(50 0)	(75 0)	(53 1)	(53 1)	(53 1)	(15 6)	(25 0)	(6 3)	(40 6)	(3 1)		(100 0)
幼児	12	41	21	7	22	17	20	10	40	1	191	48
	(25 0)	(85.4)	(43.8)	(14.6)	(45 8)	(35 7)	(41 7)	(20.8)	(83 3)	(2.1)		(100 0)
学童	1	8	3	0	7	7	7	35	35	1	104	44
	(2.3)	(18 2)	(6.3)	(0)	(14 6)	(14.6)	(14.6)	(72 9)	(72 9)	(2.1)		(100 0)
弟・妹	12	23	14	6	11	9	18	20	22	1	135	27
	(44 4)	(85.2)	(51 9)	(22.2)	(40.7)	(33.3)	(66.7)	(74 1)	(81 5)	(3.7)		(100 0)
甥・姪	8	17	9	6	8	7	7	5	9	1	77	17
	(50.0)	(100.0)	(52 9)	(35 3)	(47 1)	(41 1)	(41.1)	(29.4)	(52 9)	(5 9)		(100.0)
近所の子	4	19	3	4	7	3	7	9	20	1	77	27
	(14 8)	(70.4)	(11 1)	(14 8)	(25 9)	(11.1)	(25.9)	(33 3)	(74 1)	(3 7)		(100 0)
入院児	0	4	1	0	2	1	1	0	5	1	15	6
	(0)	(66.7)	(16 7)	(0)	(33 3)	(16 7)	(16.7)	(0)	(83 3)	(16 7)		(100 0)
その他	6	18	9	4	7	3	7	10	19	0	83	28
	(21.4)	(64.3)	(32.1)	(14 3)	(25.0)	(10 7)	(25 0)	(35 7)	(67.9)	(0)		(100 0)

＊ 重複記述であり、「乳児，幼児，学童」と「弟・妹，甥　姪，近所の子，入院児，その他」との計は一致しない

どもへの関心との関連，②子どもへの関心と子どもと一緒にいたいかの関連についてみると，①については有意な関連は認められなかったが，②については有意な関連（P＜0001）が認められた。

2）実習終了後

講義開始時と実習終了後の子どもへの関心の変化は，「関心が非常に強くなった」22名（33 8%），「関心が少し強くなった」32名（49.2%）と肯定的な変化を示した学生が83 0%を占めた。変化した内容の中には『発達の視点でみることができるようになった』，『子どもは言葉での意志疎通がむずかしいためより細やかに観察しなければならないことがわかった』，『子どもにとって母親の重要性が思っていた以上に奥深いものであることが理解できた』，『電車に乗っていても街を歩いていても前よりも子どもに目を向けるようになったし，泣いている子どもを見るとその理由を考えるようになった』などがあった。

一方，「関心が薄くなった」１名（1 5%），「特に変わらなかった」７名（108%），「わからない」３名（46%）であった。「特に変わらなかった」７名の内訳は，講義開始時より「非常に関心あり」１名，「関心あり」４名，「全然ない」２名であった。

「好きか嫌いか」では，「大好き」または「好き」に変化した学生が17名（262%）であった。講義開始時から「大好き」または「好き」と答え，実習終了後も「大好き」「好き」のまま変化しなかった学生が40名（61 5%）であった。一方，「大好き」から「好き」，「好き」から「どちらでもない」，「どちらでもない」から「嫌い」に変化した学生が８名（123%）いた。

「子どもと一緒にいたいか」に関しては，「一緒にいたいと思うこともある」から「いつも一緒にいたい」に変化，また「どちらでもない」「わからない」から「一緒にいたいと思うこともある」に変化した学生は17名（26 2%）であり，変化しなかった学生は47名（72 3%）

表３　事例に関する記述内容

１．子どもの成長と発達段階

・基本的生活習慣の自立はどの程度か

・興味・好きな遊びは何か

・精神発達が３歳程度　自分でどの程度行うことができたり、周りの状況を把握できるか

・自分の生活や疾患をどの様に感じているか

・食事・衣類の着脱、睡眠、排泄の自立度やあり方

・発作等症状の現れた時の様子や対処法　　本人はどういう訴え方をするのか

・児の家での生活はどのように過ごしているか

・食物の好き嫌い

・保育園・幼稚園に通っているか　他の子どもとの関係なと

２．健康レベル

・何の食物アレギーなのか

・喘息の服薬は今後も長期にわたって行われるのか　どの程度のケア援助が必要なのか　副作用は？

・皮膚炎の症状の程度

・掻痒感の程度　掻いている部位はどこが多いか　どんな時に掻痒感が強いか

・どんな時に喘息がでるか　喘息がおこった時の子どもの様子は？

・今回の入院の目的（原因）・ケアとしての関わり（保清なと）

・ 栄養はとのように摂取しているか　　毎日食べる食事内容と量、食欲　　食へたいものが食べれない

・ 無意識に掻いてしまうことで感染の原因になったりしないか

３．疾患・治療・入院による影響

・掻痒があったり、入院生活での多くのストレスがありそう

・入院生活の中てどのようにして毎日過ごしてるか　　入院中の生活リズム

・生活動作（ADL）の修得の程度　　病院内での関わり　　対人関係がうすいのか

・11 回もの入院を繰り返していること　　発達面への影響

・入院期間が長いことによる子どもの精神発達への影響

・ 入院中はどのように過ごしているのか

・生活での仲間関係

・安静度について

４．家族の状況と家族機能

・親との関係、また、きょうだい関係はどうか

・親の付き添いについて　両親の面会の頻度　　面会の時間、面家時の様子

・病気に対する親の理解は？

・親の育児観について　両親の今後の育児への思い

・親の経済的、精神的、身体的負担は？

・地域の協力は得られているか？ 家族を取り巻く環境

・親が抱く病院や医療スタッフへのイメージ　　医療スタッフとの関係は良好か

であった。

変化なしのうち42名は，講義開始時の調査で「いつも一緒にいたい」あるいは「一緒にいたいと思うこともある」と答えており，その他5名は，「どちらでもない」「一緒にいたくない」「わからない」であった。

なお，実習終了後に子どもへの関心を示した学生と講義開始時の子どもとの接触体験との関連に有意差はなかった。

2．事例に対する記述内容

記述の内容は，実習内容の4項目（1．子どもの成長と発達段階，2．健康レベル，3．疾患や治療，入院生活による子どもへの影響，4．家族の状況と家族機能）に対応させ抽出，分類した。各項目の内容は表3のとおりである。また，講義開始時と実習終了後とで，各項目ごとの記述内容の数を比較し，「気になること」（表4-1），「さらに詳しく知りたい情報」（表4-2），「気になることおよびさらに詳しく知りたい情報（以下，「総数」と記す）」を表4-3および図2に示した。

講義開始時の記述内容の総数は497であったのが実習終了後には763に増加していた。その内訳は，「健康レベル」の364（28.9%）が最も多く，次いで，「子どもの成長と発達段階」が343（27.2%），「家族の状況と家族機能」が293（23.3%），「疾患や治療，入院生活による影響」が260（20.6%）の順であった。

「気になる点」は，講義開始時，「疾患や治療，入院生活による影響」35.9%，「子どもの成長と発達段階」31.8%，次いで「健康レベル」27.3%，最も少なかったのが「家族の状況と家族機能」5.0%であった。実習終了後の記述数

表4-2　子ども理解からみた事例の記述数
－さらに詳しく知りたい情報－

（%）重複記述 n=65

項　目	講義開始時	実習終了後	計
子どもの成長と発達段階	73(26.3)	122(26.0)	195(26.1)
健康レベル	96(34.5)	127(27.0)	223(29.8)
疾患や治療、入院生活による影響	19(6.8)	61(13.0)	80(10.7)
家族の状況と家族機能	90(32.4)	160(34.0)	250(33.4)
計	278(100.0)	470(100.0)	748(100.0)

表4-1　子ども理解からみた事例の記述数
－気になる点－

（%）重複記述 n=65

項　目	講義開始時	実習終了後	計
子どもの成長と発達段階	70(31.8)	76(25.7)	146(28.3)
健康レベル	60(27.3)	81(27.4)	141(27.3)
疾患や治療、入院生活による影響	79(35.9)	101(34.1)	180(34.9)
家族の状況と家族機能	11(5.0)	38(12.8)	49 (9.5)
計	220(100.0)	296(100.0)	516(100.0)

表4-3　子ども理解からみた事例の記述数
－総数－

（%）重複記述 n=65

項　目	講義開始時	実習終了後	計
子どもの成長と発達段階	143(28.7)	198(25.8)	341(27.0)
健康レベル	156(31.3)	208(27.2)	364(28.8)
疾患や治療、入院生活による影響	98(19.7)	162(21.2)	260(20.6)
家族の状況と家族機能	101(20.3)	198(25.8)	299(23.6)
計	498(100.0)	766(100.0)	1264(100.0)

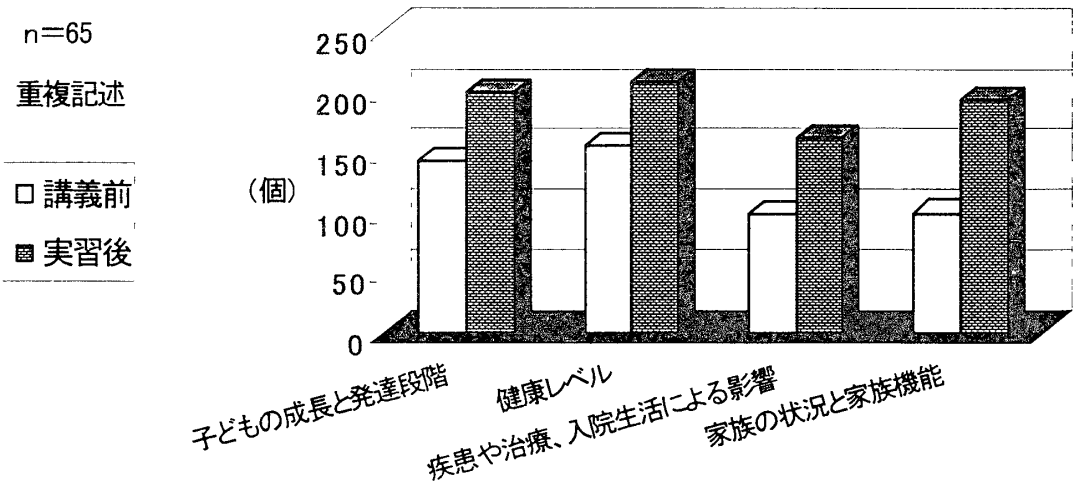

図2　子ども理解からみた事例の記述数（総数）

は4項目全て増加していたが，中でも「疾患や治療，入院生活による影響」は実習終了後も最も高い割合（34.1%）を占め，「家族の状況と家族機能」は12.8%へと顕著に増加していた。逆に「子どもの成長と発達段階」は25.1%に減少していた。

「さらに詳しく知りたい情報」は，講義開始時の「健康レベル」34.5%，「家族の状況と家族機能」32.4%，「子どもの成長と発達段階」26.3%であり，実習終了後は，「家族の状況と家族機能」34.0%，「健康レベル」27.0%，「子どもの成長と発達段階」26.0%と，前後とも「家族の状況と家族機能」の占める割合が高かった。

IV．考察

「子ども理解」は，小児看護学のもっとも重要なキーワードである。また，「子どもへの関心」は小児看護学の学習意欲に関係する。小児看護学の講義および実習を通して，学生の子どもへの関心と子ども理解の変化を把握することは，小児看護学教育において，その学習成果の有用な資料として期待できると考えている。

講義開始時において，大方の学生が子どもが好きであると答えており，同時にその多くが子どもへの関心を示し，一緒にいたいと思う傾向にあることがわかった。また，実習終了後において，「子どもへの関心」「子どもが好き」「一緒にいたい」のいずれも，大方の学生が維持でき，講義開始時には「わからない」と答えていた学生の数人も肯定的変化を示していた。「わかる」ための基本的な能力とされる知覚を十分に発揮させるためには，その前提に心の好奇心が重要である[10]。小児看護学を学ぼうとする学生の「子どもへの関心」を尊重し，その気持ちを維持させることは，学習成果の大きな指標の一つでもあるといえよう。

学生の子どもへの関心は，約10年前の楢木野らによる学生の子どもへの接触体験と認識に関する調査[11]と比較して同様の傾向を示していた。また，学生の背景としての子どもとの接触体験は，学生自身の認識の違いはあるが，約9割の学生が「ある」と答えていた。しかし，今回の子どもとの接触体験は，楢木野らの調査に比べて「度々あった」は減少し，「なかった」が増加していた。また，その対象として「近所の子ども」は減少し「弟・妹」が増えていた。さらに，同調査では子どもへの関心と子どもとの接触体験は接触体験が多いほど関心が高かったと報告されていたが，今回は関連がなかった。その要因の1つに，体験内容が「戸外での遊び」や「抱っこ・おんぶ」に比べて「排泄介助」や「授乳」，「入浴介助」などの保育技術を要する体験が少なくなっていることが考えられる。一般に，体験に基づいた関心は持続され知識の拡大につながると考えられるが，子どもとの体験の有無や頻度だけではなく，体験内容の違いも考慮した講義・実習を展開しなければならない。近隣との交流が疎遠になったと言われて久しい。少子高齢社会はなお続いている。学生が育ってきた社会環境を理解し，また，子どもへの関心のある学生ほど子どもと一緒にいたいと思っている今回の結果に注目し，関心が単なる関心で終わることなく，看護行為につながる学習プログラムが求められる。

提示した事例においての，「気になる点」と「看護ケアを行っていく場合，さらに詳しく知りたい情報」の双方を併せてみてみると，全体的な記述数は講義開始時に比べて実習終了後に明らかに増えており，総合的な子ども理解の内容である4項目のどの項目においても増加していた。項目別にみると，講義開始時では「子どもの成長と発達段階」と「健康レベル」の記述が多いが，実習終了後は前両者とも記述数は多いもののその割合は減少し，「疾患や治療，入院生活による影響」と「家族の状況と家族機能」の記述が増加していた。このことは，小児看護学の特徴である子どもの成長発達および子どもの成長発達を考慮しながら健康レベルを学ぶことへの期待と，実習終了までの達成目標とされている子どもを総合的に理解することが，学生たちに認識できていると推察される。加えて，「疾患や治療，入院生活による影響」や「家族の状況と家族機能」についての理解は，座学だけでは意識づけが困難であり，実習という体験学習を通してより広くより深く理解できることが示唆された。

さらに，「気になる点」と「さらに詳しく知

りたい情報」のそれぞれについてみてみると，「気になる点」の記述では，講義開始時において「疾患や治療，入院生活による影響」がもっとも多く記述され，「家族の状況と家族機能」の記述が顕著に少なかった。実習終了後は，「疾患や治療，入院生活による影響」の記述がもっとも多く，割合的には少ないが「家族の状況と家族機能」が目立って増加していた。この変化は前述したように実習の効果が大きく関与していると思われる。同時に，「疾患や治療，入院生活による影響」が学生たちにとって，講義開始時および実習終了後ともにもっとも気になる点として意識されている事実は，小児看護学の重要な学習・実習内容だけに大いに期待するところである。一方，「子どもの成長と発達段階」が実習終了後に今ひとつ記述が少ないのは，実習を通してその重要性を認識しながらも，短期間の実習では実践しにくい，ましてや達成までには至らないという思いの表れであろう。

次いで「さらに詳しく知りたい情報」をみてみると，講義開始時は「健康レベル」の記述が多いが，実習終了後は「家族の状況と家族機能」が占める割合がもっとも多くなっているのが特徴である。このことは，提示事例において家族についての記述がほとんどないことの理由もあろうが，学習課程，特に実習は，学生たちにとって子どもと家族の関係およびその意義を学ぶ適切な機会になっていると考えられる。詳しく知りたい情報の増加は，それが「気になる点」に関した情報にしろ，提示事例の記述不足によるにしろ，基本的な知識の増加や情報の整理が時間をかけてなされた結果であるとも読みとれる。

子ども理解の視点として，全体性，関係性，状況性，時間性からみていくことの重要性と，理論・実験・臨床の3領域が常に全体的な視野の中におかれることが不可欠であると指摘されている[12]。今回は，講義の結果だけではその成果が表れないことを予想し，講義および実習を通してその前後の，また，提示事例を通して可能と思われる全体性の視点から子ども理解の比較をみた。学生によって小児看護学実習が終了するまでの実習過程や状況の違いがあり，また，単に提示事例の記述数だけで子ども理解の学習成果として結論するには限界はあるが，講義開始時に比べて実習終了後の「子ども理解」はより広がったと解釈することもできよう。

今後は，小児看護学教育，特に学習成果の位置づけについて，看護実践につながる学習意欲と目標達成の側面からさらに検討していきたい。

V. おわりに

小児看護学教育の基礎的資料を得るために，学生の子どもへの関心と子ども理解の変化について，講義開始時と実習終了後の質問紙による比較から検討した。その結果，次のことが分かった。

1 講義開始時より多くの学生が子どもへ関心をもっていたが，実習終了後はさらに関心を持つ学生が増えていた。
2 子どもとの接触体験をもつ学生が多かったが，そのことは講義開始時および実習終了後の子どもへの関心と関連はなかった。接触体験の頻度は減少し，体験をもたない学生が増えていく傾向にあった。
3 講義・演習・実習を通しての学習目標である総合的に子どもを理解することは，大方の学生に認識されていた。
4 学生の子ども理解において，講義開始時では「子どもの成長と発達段階」と「健康レベル」に関心が強いが，実習終了後では「疾患や治療，入院による影響」と「家族の状況と家族機能」にも関心が広がっていた。実習の意義とその学習成果が再確認された。
5 さらに，小児看護学の大きな特徴であり，基本的な学習目標である「子どもの成長と発達段階」や「疾患や治療，入院生活による影響」について，講義・演習・実習を通して学ばなければならない学習項目であることが学生に意識づけられていた。

小児看護学は，看護学領域の大綱化に併せて実習時間がより短縮化される傾向にある。小児看護学の専門性および現代の学生気質を再認識し，学生の学習意欲を尊重しながら，小児看護

学の学習成果の位置づけについて検討していかねばならないと考えている。

引用文献

1) 草野美根子・寺田敦子・今福ひとみ・福池ゆかり・杉本暁子・大久保薫・酒見敬子・中　淑子・内海　滉，小児看護実習における看護学生の子どもに対するイメージの変容－病棟実習と保育園実習の因子分析的検討－，第28回日本看護学会・看護教育，143-145, 1997
2) 日沼千尋・石川真理子・海老沢のり子，小児看護学実習における学生の学び－実習前後の自己評価の比較－，日本看護研究学会雑誌，21 (3), 368, 1998
3) 草野美根子・寺田敦子・今福ひとみ・酒見敬子・中　淑子・内海　滉，子どものイメージに関する研究（第２報）－小児看護実習前後の比較－，日本看護研究学会雑誌，21 (3), 356, 1998
4) 大西文子・浅野みどり，看護学生の子どものイメージと小児看護学実習評価との関連－学生の自己評価を中心に－，日本看護研究学会雑誌，21 (3), 357, 1998
5) 加藤奈保美・内海　滉，看護学生の子どもに対するイメージの研究－保育園実習前後の比較（第一報）－，日本看護研究学会雑誌，21 (3), 359, 1998
6) 伊藤久美・飯村直子・江本リサ他・看護系大学における小児看護学実習の実態－安全対策，教員の負担や困難，実習評価について－，日本看護学教育学会誌，10 (4), 11-19, 2001
7) 坂口しげ子・関森みゆき・病児の理解と看護の評価－小児科病棟実習のまとめでの学生の気づきから－，信州大学医療技術短期大学紀要，26, 35- 46, 2001
8) 菅弘子・山本靖子・三谷浩枝・中野智津子，小児看護実習における対象理解に関する指導方法の研究：その３－指導場面の分析からの考察－，神戸市看護大学短期大学部紀要，1, 125-135, 2002
9) 山鳥 重,「わかる」とはどういうことか，認識の脳科学，筑摩書房，2002
10) 楢木野裕美・服部恵子・池田美佳子他，本学学生の子どもへの接触体験と認識に関する縦断的調査，大阪府立看護短期大学紀要，15 (1), 81-94, 1993
11) 前掲書 9)
12) 岡本真木編著，子ども理解の視点と方法，新・児童心理学講座17，金子書房，1993